



RIFS通信

2009年度
NUMBER

40-42

平成22年2月22日発行

目次

40号『海外留学・交流』 2009年7月15日発行

特集記事 I 『異文化間に人間の絆を創る地域貢献と教育プログラム』

「世界市民」育むTIUA20年の歩みと理念

東京国際大学アメリカ校 副学長 ガナー・ガンダーセン …… 2

II 『教育・研究活動を深化させるウィラメット大学との交換教授制度』

東京国際大学国際関係学部 准教授 五十嵐 義行 …… 4

III 『進化する東京国際大学とWillamette Universityの交流』

東京国際大学国際交流事務部 部長 横川 知嘉 …… 6

41号『日本語教育』 2009年12月24日発行

特集記事 I 『外国人に対する日本語支援と日本語教員養成を通じた大学の社会貢献』

東京国際大学国際関係学部 教授 岡本 能里子 …… 8

II 『在留外国人児童に対するTIUの日本語・学習支援活動に参加して』

東京国際大学大学院国際関係学研究所 修士課程2年 吉田 璠梨子 …… 9

III 『大学等へ進学できる本格的な日本語教育—現場からの報告』

東京国際大学付属日本語学校 教務主任 宮田 百合子 …… 10

IV 『国語は古文から学ぼう』

一橋学院 国語科講師 米野 正史 …… 13

42号『留学生支援』 2010年2月22日発行

特集記事 I 『東京国際大学の留学生支援について～奨学金制度を考える～』

東京国際大学国際交流事務部 部長 横川 知嘉 …… 16

II 『学生支援室による留学生サポート—現場からの報告』

東京国際大学学生課・学生支援室 瀬戸口 勲 …… 17

III 『留学生の就職を支援する東京国際大学の体制』

東京国際大学学生支援部 就職課 部長 原田 英一 …… 18

IV 『留学生の声—かけがえのない8年間—』

東京国際大学大学院商学研究科 博士課程(前期)1年 金 貞玉 …… 19

V 『TIUA/ウィラメット大学留学プログラムのケア体制』

東京国際大学アメリカ校(TIUA)キャンパス生活部・教務部 ディレクター 島田 昌己 …… 20

VI 『入学前相談から学習・生活、進路指導まで—付属日本語学校からの報告』

東京国際大学付属日本語学校 …… 23

「講師室のケア」:教務副主任 山川 正子

「進路相談室のケア」:教務主任 宮田 百合子

「事務局・海外分室のケア」:事務局次長 金子 泰敏

異文化間に人間の絆を創る地域貢献と 教育プログラム 「世界市民」育む TIUA20年の歩みと理念

東京国際大学アメリカ校 副学長 **ガナー・ガンダーセン**



20年前の1989年5月、米国オレゴン州のセーラム市に新設されたTIUA（東京国際大学アメリカ校）では、校舎が完成するより一足早く、第一期生がその門をくぐりました。TIUAの開校は長年の夢であり、TIU（東京国際大学）とウィラメット大学（オレゴン州セーラム市）が共同で異文化間教育という胸躍る試みに乗り出すことを決めた時、その夢が現実のものとなったのです。この試みでは、両者が相互理解と緊密な協力によってともに尽力し、ビジョンを育てていくことが必要でした。TIUの理念は「理想、勇氣、知的教養」であり、またウィラメット大学は「生を受けしは己のためのみならず（Not Unto Ourselves Alone Are We Born）」という理念を掲げています。TIUAの創設、発展を通じて、この二つの理念が一つに融合し、20年前に1年間の留学プログラムが始まって以来、実り多い独自の異文化間教育環境を生み出しました。そしてそれは、両校の何千人もの学生たちが体験してきたところです。今年は過去最多の総勢144名の学生がTIUAプログラムに参加しています。

このプログラムをよりよく理解していただくために、まずプログラムの学習基本構成をご説明しましょう。アメリカ研究プログラム（ASP）は、TIUの2、3年生向けの1年間（2月から12月まで）の学習プログラムです。このプログラムでは、TIUAとウィラメット大学のカリキュラムにある語学クラスや専門科目のクラスを両方とも受講することができ、取得した単位はすべてTIUの単位に置換可能です。ですから12月末にはTIUへ戻って勉強を続け、通常通り4年間で卒業することができます。

学生はTIUの5学部（商学部、経済学部、言語コミュニケーション学部、国際関係学部、人間社会学部）からそれぞれ選抜されます。ウィラメット大学はリベラルアーツ系の難関校であり、学部には1,800名の学生が在籍し、様々な専攻科目を学んでいます。カリキュラムの一般教育科目は一貫して学際的アプローチを重視し、国際論や多文化研究に重点を置いたクラスが豊富に用意されています。通常、約125名が日本語クラスを受講しており、中にはTIU

が主催する日本研究プログラム（JSP）に参加する学生もいます。また毎年TIUから3-5名の学生が、学位取得を目指してウィラメット大学に編入しています。これらの学生は二重学位取得プログラム（ダブルディグリー）によって、姉妹校である両校の学位を取得しています。

このプログラムは「学生を、国や文化の境界や障害を越え、他者の手本となり、真の国際社会の構築に役立てる世界市民へと育成する」ことを使命とし、具体的には以下のような目標を掲げています。

- 受身的な言語知識ではなく流暢さに重点を置いて、英語力の応用をはかる。
- 異文化環境での学習、生活、仕事能力を高め、勉学の成功と将来のキャリアの成功のための技能を習得する。
- 様々な人文系科目クラスやTIUでの学位取得プログラムに関係のあるクラスを通じて、専門科目の知識を習得する。
- 地域社会に好影響を与え、貢献する。

TIUAとウィラメット大学での勉学経験を生かした卒業生の実例など、アカデミックプログラムについての詳細は、TIUAのウェブサイト <http://www.tiua.edu> をご覧ください。

ウィラメット大学と連携した地域奉仕の成果

この1年間の留学プログラムの中で重要性を増しているのが、正規の授業カリキュラム以外で教育的体験ができる課外授業です。このプログラムと地域社会との関係強化に大きく役立った課外活動の一つとして、サービスマンシップをはじめとする地域支援活動を挙げることができます。特に重要な点として、川越市とセーラム市は、今から23年前の1986年に正式な姉妹都市提携を結んだことを、ここで指摘しておきたいと思います。TIUとウィラメット大学の強い交流関係が、このような実を結んだのです。両市の姉妹都市関係は、このプログラムと地元社会の結びつきが広がるにつれてさらに発展し、またその結びつきに恩恵

をもたらしています。同時に、奉仕を通じた学習を重視する両大学の姿勢は、地域社会への貢献とそれに伴う教育への好影響を生み、さらにアメリカ各地の地域社会との結びつきへと広がっています。

TIUA がウィラメット大学とともに地域社会に奉仕する基本的な方法の一つとして、地元のセーラム・カイザー学校区との結びつきを活用する方法があります。長年にわたって色々な交流イベントが行われており、その中には TIUA の特定のクラスが参加するものもあれば、日米文化交流プログラム (JACE) を通じて行われるものもあります。一般には文化交流が多く、TIUA の学生は日本文化の象徴的な側面 (折り紙、書道、武術など) について発表を行っています。アメリカの生徒はクラスで勉強している内容を紹介することが多く、TIUA の学生にとって貴重な学習体験となっています。しかし地域社会への奉仕は、今や地元の学校との交流にとどまらず、さらに大きな広がりを見せています。

地域社会への支援とサービスラーニングは、TIUA/ウィラメット大学における体験の重要な部分を占めています。毎年、学生たちは合計 9,000 - 1 万 1,000 時間程度のボランティアサービスを行っていますが、これには英語科目や選択科目授業クラスの一環として数多く行われているサービスラーニング活動は含まれていません。このような奉仕活動はウィラメット大学の学生たちと一緒に行うものが多く、青少年、高齢者、ホームレス、地域清掃、動物シェルターなどの青少年・高齢者支援団体と共同で実施したり、セーラム市やポートランド市地域で行われる文化・地域イベントに参加したりすることもあります。さらに、TIUA の学生は毎年夏休みに「カネコ・デイキャンプ」で、地元の子供たち 70 - 80 名に日本語や日本文化を教えています。

TIUA とウィラメット大学の学生の奉仕活動は、ハビタット・フォー・ヒューマニティ (低所得者住居援助)、マリオン & ポーク・カウンティーズ・フードシェア (郡食料供給サービス)、セーラム・シニアセンター (セーラム高齢者支援センター)、カスケード・エイズ・プロジェクト、コロニア・リベルタッド (移民家族用居住施設)、YWCA、ティーン・ペアレント・プログラム (十代で子供をもった若者の支援)、ボーイズ & ガールズ・クラブなど、多くの団体のために役立っています。また学生たちは、ワールド・ビート・フェスティバル (世界芸術祭)、シルバートン・フェインアーツ・フェスティバル (シルバートン市芸術祭)、セーラム・アートフェアなど、数多くの地域イベントでも文化的な発表を行っています。

このような活動に加えて、TIUA の学生はテイク・ア・

ブレイク (TaB) 「ちょっと違った春休み」プログラムにも参加しています。これは春休みを利用してウィラメット大学の仲間たちと一緒に、オレゴン州だけでなく全米各地で様々なプロジェクトに参加するもので、そこには人生を変えてしまうような素晴らしい体験が待っています。ウォーム・スプリングズ先住民居住区 (オレゴン州) で幼児教育に携わったり、ポートランド市 (オレゴン州) のコミュニティセンターでホームレスの若者と共同作業をしたり、サンフランシスコ市でエイズ患者を支援したり、ニューオーリンズ州やミシシッピ州で住宅や学校施設を建設したりと、その活動は多岐にわたっています。さらに、毎年 TIUA の学生の約 60 - 70% が、全国で奉仕活動に携わった時間数をもとに認定される大統領ボランティア活動賞を受賞しており、これこそ学生たちの素晴らしい活動を示す揺るぎない証拠といえるでしょう。詳しくは <http://www.presidentialserviceawards.gov/tg/pvsainfo/dspAboutAwards.cfm> をご覧ください。

2009 年の夏休みに、TIUA の学生たちはウィラメット大学の協力と TIUA 職員の支援を得て次のようなプログラムを実施し、地域社会との結びつきをさらに深めようとしています。(1) 「貧困とホームレスに向き合おう」(2) 「すべてをグリーンに：環境と持続可能性」(3) 「感染症を理解する：エイズ/HIV」(4) 「伝統を守る」(現在および過去においてラテンアメリカや日本からオレゴン州に移住してきた人々)

通常の留学レベルを超える体験教育

TIUA の学生がオレゴン州はじめ全米各地の様々な地域社会にもたらす貢献の範囲と度合は、通常の米国における留学生のレベルをはるかに上回っています。これは、サービスラーニングが TIUA とウィラメット大学のプログラムに組み込まれているからこそ可能なのです。もちろん、このプログラムの使命にとって最も大切なのは勉学体験ですが、TIUA とウィラメット大学の学生たちによる地域奉仕活動がもたらす長期的・多面的な影響は、ステレオタイプを打ち砕き、人々の間に共通の絆を作り上げる力を持っています。

来訪者を喜んで迎え入れるセーラム市民の温かい歓迎の精神も、「トモダチ・プログラム」の成功に一役買っています。過去 20 年にわたって、セーラムの都市部に住む何百もの家族がこのプログラムに参加しており、各家族が学生を受け持ち、年間を通じてその学生を家族の様々な活動に招待しています。このプログラムによって、これまでに

多くの固い友情が育まれてきました。

このようにユニークな1年間のプログラムを通じて、学生たちは英語力を高めるとともに、異文化環境における勉強や生活、そして仕事を成功に導くのに役立つ異文化知識と実際的な生活スキルを体得しています。サービスラーニ

ングと地域社会への様々な支援を通じて、学生たちは世界市民になるため積極的に努力し、真の国際社会の構築に役立つことができるようになります。また、そうすることで21世紀の世界に生きるための準備を整えることができるのです。

教育・研究活動を深化させるウィラメット大学との交換教授制度

東京国際大学 国際関係学部 准教授 五十嵐 義行

東京国際大学 (TIU) と、その姉妹校である米国オレゴン州ウィラメット大学 (WU) では、その学術・教育交流の一環として、互いに毎年1名の教員を相手先に交換教授として短期派遣している。筆者も、2007年1月～3月にその機会を得た。そこで、その概要を振り返りながら、その目的・意義と成果ならびに今後のあり方について私見も交えて申し述べる。

TIU-WU 交換教授制度の主な目的は、いうまでもなく学術・教育交流である。互いの大学を訪れて一定期間滞在し、自身のこれまでの研究の成果を発表したり、共同研究を行ったり（あるいは共同研究の可能性を探ったり）し、また相手先の教育に何らかの貢献をなすことである。さらに2007年派遣からは、これを充実させ、WUの教育に本格的に貢献できるように、派遣時期を原則として1月中旬から3月までの間とした。これにより、TIU側の春期休暇にはほぼ対応する範囲内でかなり自由な派遣期間の設定ができる上、WU側がちょうど春学期の前半期（1月中旬～3月上旬）に当たるので、WUの正規（半学期）授業科目を提供する道が開かれるからである。

筆者は、この改正後の第1期派遣教員として、2007年1月13日から3月12日まで現地に滞在し、0.5単位（日本の2単位に相当）の春学期前半期科目のひとつを担当した。担当科目は Contrastive Linguistics（特に日英語比較による対照言語学入門）。受講者数は、3、4年生を中心に23名だった（ちなみに、WUではほとんどの科目が20名程度をクラスの上限履修許可人数としており、少人数教育が徹底していることが分かった）。授業時間は週3時間を基本とし、週1回3時間、週2回1時間半ずつ、週3回1時間半ずつの3つの授業パターンがあったが（週2回1時間半ず

つが最も多い）、半学期という短い期間の中で授業回数を増やしてできるだけ多くのことをカバーすることなどを考慮して、週3回1時間ずつの方式を選択した。

具体的な授業については、筆者は留学経験もなく、アメリカ式の大学授業のやり方に精通しているとは言いがたかったため、アメリカの大学での学習に関する留学生向けの小冊子を国際教育部からいただいて熟読したり、何人かの先生にお願いして授業参観をさせていただいたりした。それらを参考にして、できるだけディスカッションや課題練習を取り入れた形で、一方的な講義にならないように配慮し、「学習者主体」の授業展開を心がけた。また、教科書を使用するのみならず、毎回パワーポイントを長時間かけて準備した。しかしながら、なかなかWUの先生方のように様々な趣向を凝らした工夫された授業を行うことはできず、その点が反省点として残った。

受講学生は、日本語科の学生が約1/3いる以外は、様々な専攻分野の学生が混じっていた。しかし、みな一様に日英語比較の対照言語学というテーマに大変興味があったようで、熱心に授業を聴いてくれ、質問も大いにしてくれた。また、ディスカッションや課題にもおおむね真剣に取り組んでくれた。これらのおかげで、筆者にとっても非常に大きな刺激と勉強になったとともに、受講した学生にとっても、日本語という彼らの母語と全く異なる言語を対象とする授業は大いに興味深く学ぶところがあったように見受けられた。互いに良い相互作用、相乗効果をもたらしたと言えるのではなからうか。少なくとも筆者にとっては充実した授業であった。

WUコミュニティの 多文化・多民族化に貢献

以上の経験を踏まえて本制度の意義・成果を考えてみると、以下のような点が挙げられる。まず、派遣される教員にとっては、第一に米国の大学に短期間でも籍を置き、そのファカルティー・メンバーになること、そして米国スタイルの授業を見聞し、自ら実践しようとするのは、学ぶことが多い。米国の大学等の高等教育機関の仕組みやそこでの教育について、直接体験にもとづいて理解を深められるとともに、自らの授業方法を振り返り、改善を目指すまさにファカルティー・ディベロップメント (FD) となりうる。教員交流や研究の面では、何といたっても人的ネットワークが広がる点が重要である。派遣教員の研究に興味を持ってもらい、共同研究へ繋げていければ言うことなしであるが、よしんば適当な共同研究者が見つからなくても、リベラルアーツ・カレッジの特性を生かして様々な専門分野の教員がWUにはいるので、様々な異分野の知己を得て、相談相手と研究の幅を広げる可能性が生まれる。

ウィラメット大学にとっては、TIU教員が一定期間毎日キャンパス内にいて、日常的にその存在を目にしたたり、直接話を聞ける状態にあり、毎週定例の教員懇親昼食会やその他の各種の行事に参加したりすることで、WUにおけるTIUのプレゼンスが高まり、理解が進み、友好関係が促進されるきっかけとなる。また、米国とは異なる文化・背景から来た教員がいることによって、WUコミュニティの多文化・多民族化に貢献することになり、学術的にも、WUの学術環境が豊かになることは疑いえない。

そのうえ、私の滞在中にWUの学内研究拠点としてアジ

ア研究センターが設立された。TIUからの派遣教員は、この研究拠点にとって重要なリソースとなる。以上の理由から、WUの研究の向上に大いに貢献することになると考えられる。教育面でも、日本の大学の教員が貢献できることは大きいと思われる。ちょうど筆者がWUの教員からアメリカ流の教育手法を学び、大いに参考になったように、WUの教員や学生たちも、TIUの教員から学ぶ点があろう。さらには、WUにその分野やテーマを研究している教員がいない場合には、カリキュラムを補完する意味も大きくなるし、当該分野の教員がいてもカリキュラムの厚みを増すために必要だという場合にも、重要な一翼を担うことになる(私の担当した言語学分野も、充実したい分野だということで、講座開講を大いに感謝された)。

東京国際大学アメリカ校(TIUA)にとっても、WUへの交換教授はもちろん無縁の存在ではない。TIUAとWUをつなぐハブの一つとしての役割を担うことにもなり、TIUAとTIUとのパイプ役の一部も果たすことになる。また、TIUAの教職員との交流も重要な仕事である。最後に、東京国際大学にしてみれば、本学の重要な民間外交大使の役割を担っているのであり、また派遣先で得た経験や知識を本学に持ち帰り還元する使命も帯びている。

以上のような重要な役割や意義をもつWUへの交換教授制度である以上、十分にその目的を達成して維持されることは、TIU・WU両大学の関係の維持と強化・発展のために欠くべからざるものである。一方で英語での講義という障害もあるが、何とか解決策を見出して、毎年とは言わずとも、ある一定の短いサイクルでWU正規科目を開講できる形での教員派遣が継続されることが強く望まれるところである。



進化する東京国際大学と Willamette University の交流

東京国際大学 国際交流事務部 部長 横川 知嘉



ウ大との提携関係は、1965年国際商科大学（現東京国際大学）の創学まで遡ることができます。当時の金子泰藏初代学長は、「真の国際人の養成」という教育方針の実現のため、アメリカでの海外交流協定校を探すため遥々海外に渡り、偶然見つけたウ大のスミス学長の名にひかれウ大を訪問しました。かつて勤務していた商工会議所時代に知遇を得たまさにその人物でした。提携の話はトントン拍子に進み、まだ校舎も建築中で開校もされていないTIUでしたが、金子泰藏初代学長を信じ提携関係を約束してくれました。そしてその夏には、第1回ウ大夏期海外ゼミナールがスタートし、21名の学生が参加しています。このプログラムは1986年まで続き、延べ1015名の学生が参加しています。

正式にウ大と交流協定を結んだのは、1969年のことです。この年に初めてウ大の学位を取得した学生が現れ、1975年には初のDouble Degree取得者を輩出しています。現在TIUとウ大のDouble Degree取得者は96名にのぼります。

1973年には、ウ大エクステンション・キャンパス・プログラムがスタートし、29名のウ大生がTIUを訪問しました。このプログラムには、述べ228名のウ大生が参加をし、1989年からは現在のJSP（Japan Studies Program）として毎年20名程のウ大生が参加をしています。ウ大生のJSP参加は述べ224名に上っています。両プログラムで合計452名のウ大生がTIUで勉強をしていることになります。

こうした両大学の国際交流の進展の中から生まれたのが、1989年に設置された東京国際大学アメリカ校（TIUA）です。ウ大の隣接地にあった工場が移転し、運よくそこを購入することができ、長年の夢であったTIU生のアメリカでの学習拠点ができたとのことばかりでなく、ウ大生の一員としてまた地域コミュニティーの一員として、アメリカで1年間のキャンパスライフを体験することが大きな特徴となっています。ウ大生と同じ寮に暮らし、数々のウ大の行事に参加し、同じ教室で学びます。時には共同でボランティアを企画・運営し、なかにはリーダーとして活躍す

るTIUA生もいます。このTIUAプログラムには、毎年100名程度が参加をしており、TIUA20周年を迎えた2009年度派遣者（21期生）を含め、通算で2100名のTIU生が参加しています。

現在の両校の提携内容は、姉妹校として非常に密接なものになっています。大きな柱は、学生交流と教職員の交流です。学生交流では、TIUからウ大への学位取得を目的とした長期留学とウ大からはJSPへの参加です。TIUからは毎年5名程度を派遣しています（2年間の留学期間であるためウ大への留学者は毎年10名程度になります）。教職員交流では、教員は相手先大学での授業や講演活動、共同研究活動を行い、職員は関連部署での研修や見聞を広めることを主眼としています。このような相互の派遣が相手先大学の理解と教育の充実につながり、更に姉妹校としての関係強化に役立っています。実際、ここ3年間はウ大から3名の交換教授、6名の交換職員を受け入れ、TIUからは3名の教員、3名の職員をウ大に派遣しています。延べ人数では、ウ大から30名の交換教授を受け入れ、TIUから15名の交換教授を派遣しています。またオープンレクチャーの講師もここ5年間毎年ウ大に依頼しています。

こうした友好的な姉妹校関係を維持し、更に発展させるために、両大学では基本的に6月にウ大で、10月にTIUで、TIUAの教職員も交え、TIU/WU-TIUA定期協議を開催し、相互の理解と教育研究活動の活性化を検討し、実行しています。

TIUの「真の国際人の養成」という教育理念の実現のため、関係各位のご協力を宜しくお願い申し上げます。

外国人に対する日本語支援と日本語教員養成を通じた大学の社会貢献

東京国際大学国際関係学部 教授 岡本 能里子

約700名の留学生に日本語学習を支援

多くの留学生に囲まれた環境の中、本学の日本語支援は多様な広がりを見せ、大学の地域支援や国際支援といった社会貢献につながって来ました。本稿ではその課程と成果および今後の可能性についてご報告致します。

青空に旗めく第一キャンパス図書館前の色とりどりの国旗が示すように、東京国際大学には2009年5月1日現在、世界21カ国から5学部で567名、大学院に86名の留学生が在籍しています。人数の多い出身地域順に、中国、韓国、台湾、ベトナム、タイ、モンゴル、ネパール、マレーシア、イギリス、カンボジア、インドネシア、スリランカ、ミャンマー、イタリア、インド、コートジボアール、スウェーデン、セネガル、マカオ、香港、南アフリカとなっています。これに、JSP生と国費留学生を加えると、約700名となり、全在籍学生数の約12%を占めています。各学部で、これらの外国人留学生のための日本語科目が必修科目として開講され、ゼミで日本人学生と対等に議論し、日本語で卒業論文を書きあげ、日本で就職できるための日本語力育成が行われてきました。

また、授業以外でも、留学生の能力やニーズに応じて個別に日本語の支援を受けられる日本語学習支援システムが両キャンパスに設置されています。国費や短期留学生もこの支援システムを利用しており、更に姉妹校のウィラメット大学からのJSP生に対しては、PAとよばれる学生アシスタントが日本語支援をしています。

このような日本語支援体制の重要性が増してきた中、1998年に国際関係学部において5学部オープン「日本語教員養成課程」が開設されました。

社会変化に対応する日本語教員の育成

留学生が日本語を学習する目的の変化は、常に国際関係とそれを取りまく社会の変化と呼応しています。海外においても、日本語学習者は増え続けており、現在約300万人となっています。海外の日本語教育については、1989年に国際交流基金日本語国際センターが開設されて以来、人材育成、教材開発など多様な事業がおこなわれてきました。更に、JICAの青年海外協力隊の派遣分野の1つにも日本語教育があり、日本語教育を通して国際協力、国際支援に貢

献しています。日本語教員養成課程では、このような社会の要請に鑑み、開設以来鋭い言語感覚と豊かな国際的知識及び国際コミュニケーション能力を通して、創立者の目ざした「世界と日本の距離を縮めることのできるコーディネータ」を育成すべく試行錯誤をしてきました。



実践力のある日本語教師を育成する実習先の開拓

当時日本語教員養成課程を開設する際、最も重要な点は、どのような内容にすれば多様化しつつある日本語学習者のニーズに応えられる即戦力のある日本語教師を育てることができるかということでした。その目標の達成に不可欠なことは実習先の確保でした。というのは、通常の教員免許とは違って、国家免許ではないこと、実習生の母校といった実習受入れ先がないことなどにより、開設した教育機関で実習先を地道に開拓していかなければならなかったからです。幸い本学には、附属日本語学校があり、養成課程1期生9名全員が附属日本語学校に於いて第1回目の日本語教育実習を受けることができました。それ以来、毎年附属日本語学校で実習生を受入れていただいています。

更に、履修生が増えたことで、実習先の開拓が必要となり、ウィラメット大学、TIUA、学部、地域ボランティア日本語教室と拡大し、教育の充実を図ってきました。2004年度からは、本学の特色である学外での学びの機会促進の理念のもと、「学問の知」と「実践知」の統合を目指した国際支援の学びを目的とした海外フィールドスタディーの一環としてモンゴルの高校において日本語実習を開始しました。

地域ボランティア日本語教員養成講座も

グローバル化の波は川越市にもおよび、平成に入っればらくして労働移動などで年々増加する外国人のための日本語支援が公民館で始まりました。外国人の方々の生活相談で最も多かったのが日本語の問題だったからです。そこで、遠藤克也副学長のご尽力により、本養成課程の経験を活かし、大学と川越市との連携を通して川越市ではじめて市民の方々に「単位」が出せる地域ボランティア日本語教員養成講座がスタートしました。私は当初コーディネートを依頼され、

学部を越えた日本語教員で協力し合い、市民日本語教師育成に携わる機会を得ました。私自身これまで経験のない市民ボランティア日本語教師養成であり、市民の方々と共に学ばせていただきつつ今日に至っています。今ではその講座を終えた市民の方々が川越市の外国人支援を担っておられます。

また、外国人の労働移動に伴い、家族として来日し、日本語支援が必要な外国籍の児童生徒が市内の小中学校に増えています。この状況は各地で社会問題になっており、その支援における川越市との協力体制とその成果は以下の院生の紹介にあるとおりです。

海外で日本語教員として活躍するインターン

日本語教員養成課程履修生の進路先としては、上記のモンゴルでの実習先である新モンゴル高校において、1期生が次年度より教師として赴任し、2005年度から現在までに、4名が採用され、来年度の採用者も決定しています。

付属日本語学校では、実習後、希望者は教務課窓口申請し許可を得れば、在学中にも研修を受けることができるようになり、既に数十名が研修を受けました。それらの学生の中からも何名かが卒業後に付属で日本語教師として採用され活躍しています。

ウ大で日本語実習を終えた学生たちは、帰国後更にモンゴルでの実習や、付属の研修、学内の日本語学習支援システム、JSP生のPA等を通して実践を積む機会を得、その経験を活かし、ウ大の日本語Language Assistantに採用されるようになりました。現在までに連続して5名がウ大で採用され、その成果によりウ大から毎年推薦の依頼が来るようになってきました。その他、山西大学、韓国、タイの大学、ミャンマー、マレーシア、国内の日本語学校の日本語教員、国立大学の留学生センター職員など、進路先も徐々に広がり、来年度は、ウズベキスタンの国立大学の日本語教員として採用も決まりました。

「留学生受け入れ 30万人計画」で急増する日本語教育需要

国内において留学生受け入れ30万人計画が発表され、優秀な留学生の確保が大学改革における重要な課題になっています。毎年国立大学に10名以上の合格者を出している上記実習先の新モンゴル高校からは、2005年から毎年確実に1名が推薦入学しています。昨年と今年、本高校卒業の留学生がTIUAに留学し活躍しており、TIUA留学が米国と他国との国際交流の機会を提供する場にもなっているといえましょう。

モンゴルと同時に2004年にスタートしたパプアニューギニアのフィールドスタディーの受入れ先であるオイスカに於いて、昨年度より日本国内で実施されている途上国研修生の農業研修のインターン受入れが開始されました。彼らは日本各地での研修に出る前に日本語を集中的に学びます。ここでは研修生に対する日本語教育の機会も提供していただき、そのお礼をこめて学生たちが農業研修のための日本語教材の作成を始め、オイスカも期待を寄せています。

以上のように、様々な国や機関とのネットワークが構築され、当初養成課程開設時には予想もしなかった広がり生まれて来ました。それは、日々留学生と日本人学生が机を並べて学習しているという豊かな環境と共に、姉妹校や提携校等各国教育機関や市民の方々が「世界と日本の距離を縮めることのできるコーディネータ」を育てたいという本学創立者の精神に賛同され、国境を越えて未来を背負う若者の育成を目指して伴走していただいているからこそその成果だと思っています。

最近では、毎年留学生の中からも日本語教員養成課程の修了生が出るようになり、母国の大学で日本語教員を目指す者や、母国で日本語学校開校のための準備を始めている卒業生も出ています。

今後一人でも多くの学生たちが「真の国際人」として巣立ち、活躍してくれることを願うと同時に、このような卒業生たちを宝物として繋がりを大切に、共に大学の発展に寄与できればと思っております。

在留外国人児童に対する TIU の日本語・学習支援活動に参加して

東京国際大学国際関係学研究所 修士課程2年 吉田 瑠梨子 (群馬県立富岡東高等学校出身)

平成20年度4月、この地域学習支援ボランティアは開始しました。昨年度より国際教育プログラムの一環として支援が本格的に体系付けられ、すでに40名ほどの学生が参加をしています。この中で私は、学生コーディネータという連絡・調整役として携わっています。

児童の隣に座って手助け

地域学習支援は主に、川越市内の小中学校の児童生徒を対象とし、英語授業における補助や外国籍児童に対する日本語



支援を中心に活動を行います。期間は長くても半年、短くて数日という期間で、直接本学の学生が小中学校へ赴いて支援します。日本語の支援については、支援校の意向に添った形で行われます。クラスに入り児童の隣に座って支援を行うことや、図書室など別室で日本語を教えることもあります。教科書や教材も、学生が担任の先生や児童と相談しながら決定します。時には学生自身が手作りで教材を作っていくこともあり、常に思考を凝らして支援を行っていました。このボランティアの参加資格は、英語科・社会科の教職員免許取得予定者、または日本語教員養成課程履修者が対象となっています。1年生から4年生まで参加ができ、中には他の学内のボランティア活動にも参加している学生もいます。

東京国際大学には、東京国際大学アメリカ校への留学や海外短期留学、フィールドスタディー・プログラムや学内の様々なボランティア活動など、学生自身が考え実践する場が数多くあります。参加学生は授業で得た知識を、実際の教育現場へ持ち込み、自分自身で考えながら実践・行動することが求められます。これまでに参加した学生は、実際に教室に入ることによって児童生徒との接し方や教え方、教室内での自身の役割を常に考えながら実践していました。時には迷い悩みながら支援を行うこともありますが、児童生徒と日本語を通して会話ができた時の喜びは、他では経験できないことだと思います。このように学生自身が試行錯誤しながら実践・行動することができる場が、地域学習支援の特長です。

地域にいる外国籍児童について説明しますと、両親の仕事の都合で来日しているため、彼らの多くは日本語が話せないまま日本の小中学校へ通っているというケースがあります。そのため、他の児童とうまくコミュニケーションが取れずに疎外感を感じてしまうことがあり、彼らがクラスでこのような状況にならないためにも、日本語支援は欠かすことはできません。そして、何より彼らの「伝えたい」という気持ちを引き出す道具として日本語の支援は重要であると感じています。習得した数少ない日本

語を使って一生懸命伝えようとしている姿は、私たちに日本語支援の本当の意味を教えてくれたような気がします。地域の日本語支援は、日本語教育の在り方を再確認するとともに、人の「伝えたい」という気持ちを引き出してくれる、一つの重要な道具であると実感することができる場であると言えます。

外国人数全国 5 位の埼玉県

このような地域の日本語教育の場は、全国的にみても大変重要な場となっています。平成19年、埼玉県に住む外国人登録者数は、全国5位の約12万人に上っています。さらに、全国の在留資格を持つ人口の総数は約200万人で、その内家族滞在者の総数は約10万人となっています。東京国際大学には毎年多くの留学生在が入学しているため、日本人学生しかいないクラスは数少ないでしょう。留学生の中には、卒業後日本の企業に就職する学生も多く、日本経済を支える一員となっています。日本で働く彼らとその家族が多く在住する現在では、地域の日本語教育支援の需要はさらに増えることは間違いありません。地域に対する大学の貢献という面から見ても、地域学習支援の活動は大変重要な役割を担っていくことになるかと期待できます。

世界中で人の移動が容易に行われるようになった現代では、さらに越境する人々は増加すると予想されます。日本では、介護福祉士や看護師としてインドネシア人の受け入れや、留学生30万人計画が予定されているなど、多様な背景を持つ人々が在住することとなります。そのために、これからの日本に必要なことは、多様な背景を持つ人々を受け入れる法制度の整備はもちろんのことですが、私たち地域住民の理解がこれからの日本には求められるのではないのでしょうか。この地域学習支援の活動を通して、どちらか一方が「教えてあげる」のではなく、互いに「理解し、協力し合う」ことの大切さを、学び感じ取ってほしいと願っています。

大学等へ進学できる本格的な日本語教育 —現場からの報告

東京国際大学附属日本語学校 教務主任 宮田 百合子

最近、街中で携帯電話を持った若者があきらかに日本語ではない言葉で話していたり、外国人が流暢に日本語をあらゆる芸能番組がおなじみとなったり、近所に外国籍の人々が住んでいることも珍しいことではなくなりました。

かつて「日本語学校」に勤めている、「日本語教師」を

している、などという、「英語が堪能なんですね…」などと感心されたり、国語教師と混同されたりしたものです。今では、多くの大学が日本語の主専攻、副専攻課程を設置、1986年からは、日本語



教師の認定試験として財団法人・日本国際教育支援協会（現在）の主催する「日本語教育能力検定試験」が実施され、日本語教師の専門性が認められるようになりました。

留学生 30 万人計画

今年の7月（2009年）、政府はモノ、ヒト、カネ、情報の流れを展開する「グローバル戦略」の一環として、2020年を目途に「留学生30万人計画」を発表しました。30万人という一見、多いようですが、世界に270万人いる留学生数と比べれば、日本の留学生受け入れはまだ少ないようです。

ところで、一般に「就学生」と「留学生」の違いを認識している日本人は少ないでしょう。ここでいう「留学生」とは、主に大学院、大学、専門学校などで学ぶ外国籍の学生のことで、「就学生」とは、「日本語学校」などで日本語を学んでいる学生ですが、彼らの大半は、その多くが大学院、大学、専門学校に進学する予備軍として、数年後の留学生数の動向を占う重要な存在といえます。

東京国際大学附属日本語学校・設立

1983年、中曽根康弘内閣によって留学生10万人計画（この計画は、2003年に達成）が発表されると、いわゆる「日本語ブーム」「国際化」といった言葉が頻繁に聞かれるようになるなど、日本語学校が次々に設立され、一時は、日本全国で460校を超える日本語学校が設立されました。

しかし、その後、日本語学校の設置基準が厳しくなるなど、多くの日本語学校が姿を消しました。このような社会情勢のもとで、1987年、『大学等への進学に合わせた本格的な正しい日本語教育の実践（10年史より）』という理念のもとに、前年度、「東京国際大学（TIU）」と校名を変更し、総合大学としてスタートした大学の附属校として進学予備教育課程とビジネスコースを設置した「東京国際大学附属日本語学校」が設立されました。当初、学生24名、教員10名（日本語、英語）事務職員6名でスタートしたと記録されています。当時の教務主任は、10年史の中で『創立の頃と申しますと、何といいましても書棚だけが並んでガ

ランとした講師室を思い出します…』と述べておられ、その頃は、まだ、市販の日本語教材も少なく、『学生数が6～7倍に増えた1年後には、手作り（手書き）の教材作りに追われる日々でした…』とも書かれています。

それから20余年経った今日、本校は、学生数も300名を超え、東京国際大学（TIU）をはじめ大学や専門学校への進学実績を誇る日本でも有数の「全日制日本語学校」という評価を得るまでになりました。当初、本校は台湾からの学生が中心で、その他、韓国、マレーシア、タイなど、日本と貿易関係などのある親の仕事を継ぐため、日本の大学に進学する目的の学生が大半でした。

日本語学校のカリキュラム

日本語学校が世間に認知されるようになった今日でも一般の人々は、「日本語で日本語を教える」とは、どういうことか？また、1年か1年半で専門が学べるようになる語学教育とはどんなものか？という疑問をお持ちのようです。それは、私達日本人が学校で「国語」として学ぶ日本語の文法の難しさや、学校教育の英語教育が英語運用力に結びつかないという体験からくる疑問でしょう。「日本語学校」は1クラス20人以下という決まりがあり、クラスにはさまざまな国籍の学生が学んでいて、教室の中の「共通言語」は「日本語」しかないのが、まず、現実です。そこで、国語とは全く異なった視点から日本語を捉えて分析し、外国人が「日本語を学ぶ」ための「日本語教育シラバス」が作られました。このシラバスではゼロレベルから日本語を日本語で教えることが原則です。また、語学教育は「話・聴・読・書」という四技能をバランスよく身に付けることが必要です。本校では、初級の段階（3ヶ月）では、「日本語の基本的な構文や文法、500字程度の漢字、日常的な語彙、機能的な場面別会話能力」を身に付けて、中級・中上級レベル（6～9ヶ月）では大学等で専門を学ぶに足る「読む・書く」能力を主に養い、上級・超上級レベルでは、四技能の総合的プログラムに移行します。

下記の表は、日本語学校における1年間の主な行事などです。

PT = プレースメントテスト TIU = 東京国際大学

4月	PT、入学式（1年コーススタート）	新入生交流会	TIU 新入生合同歓迎会
5月		防災館体験①	TIU スポーツ交流会
6月	<第1回日本留学試験>	社会見学	進学先リスト作成① 大学・専門学校外部説明会、開始 TIU 教育実習・前期
7月	<第1回日本語能力試験> 期末テスト 全校統一試験	ホームステイ 盆踊り 花火大会	TIU・見学、学部説明会 専門学校見学・体験 短期研修生来日

8月	夏期休暇	ホームステイ	短期研修生来日
9月	前期授業終了・クラス再編成	スピーチ大会	進学先リスト作成②
10月	PT、入学式（1.5年コーススタート）	新入生交流会	TIU 推薦入試校内選考 (前期私立大学入試開始) (専門学校入試開始)
11月	<第2回日本留学試験>	防災館体験② 着付け教室	TIU 推薦入試・一般入試 TIU 秋霞祭 TIU 教育実習一後期
12月	<第2回日本語能力試験> 期末テスト 冬期休暇	スポーツ大会 ホームステイ クリスマス会	短期研修生来日
1月		俳句大会・成人式 小学校交流会	短期研修生来日
2月	卒業試験	旧正月祝賀会 クラブ発表会	(後期私立大学入試開始)
3月	期末テスト（10月生） 卒業式・春期休暇		(国立大学入試)

「日本留学試験」は、「日本語能力試験 1984～」と「私費留学生統一試験 1970～」(日本の「大学入試センター試験 1979～」に類似)を統合して、2002年から、日本の大学に進学する外国人学生のための「日本語」と「文系・理系課目」の試験ですが、実際に、本試験の結果を入学の可否に反映しているのは、国公立大学と一部の私立大学だけです。

一方、今年(2009年)から「日本語能力試験」の実施回数も2回(7月と12月)となり、日本語を学ぶ外国人にとって唯一の日本語能力の証明(～級合格証発行)となっているため、日本語学校は、このような試験対策に多くの時間を費やしているのです。

また、本校では、さらに学生の多様化に適応すべく2002年より、準備教育課程(日本とは教育制度の異なる国からの学生が日本の高校3年間の基礎科目を学んで大学・専門学校への入学資格を得る)が新設され、現在、香港やマレーシアからの多くの学生がこの課程で学んでいます。上記の表からも分かるように、留学生(就学生)を対象にした大学院・大学・専門学校の入学試験は、日本人学生の試験日程とは大きく異なり、6月の中旬ごろから外部の説明会などが始まり、学生たちも進学の準備に入ります。本校では、入学時から進路アンケートなどにより学生本人のニーズを把握し、進学・進路相談室での個別面談などを通して個々に日本の進学情報を提供し、自分の専攻や学部学科を探っていく準備をさせます。また、東京国際大学(TIU)をはじめいくつかの大学の説明会を本校で開催したり本校卒業生による懇談会を開いたり、面接や入試問題、小論文などに対応した授業を設けるなど、日本語能力の面だけでなく情報提供や、個人的な進学・進路相談にも力をいれ、進学

実績にも大きな成果を上げています。

日本の生活・異文化体験

来日したばかりの学生は、日本で「日本人」と交流し日本社会を体験できると、心弾ませています。ところが、当然のことながら「日本語学校」は、一種の閉鎖社会のようなもので、接する「日本人」は教師や事務職員のみで、一般の日本人が存在しない場所なのです。もちろん、本校は「東京国際大学(TIU)」の付属校として、大学との新入生交流、秋の秋霞祭、スポーツ交流などを通して大学生活の一端に参加でき、教育実習生や研修生と交流できるという特典がありますし、本校の近隣大学、特に早稲田大学の国際交流会とは毎月のように交流する機会があります。授業の中でも、「特別体験授業」として、日本語教師ではない他の専門をお持ちのボランティアの方々に、「日本の経済」「日本人の礼儀・マナー」「日本の国際貢献」「ストレッチ運動でリフレッシュ」などの授業をお願いしています。これらの授業は、講義を受けるというよりも、さまざまな日本人に接する機会を持ち、日本語以外の知識を得るきっかけになってほしいという考えからスタートし、もう4年目になります。ボランティアの方々には、大学入試のための面接練習をお願いすることもあり、本校にとって貴重な存在です。

また、本校には、茶道、華道、書道、囲碁・将棋などのクラブ活動があります。上記の「1年の生活」で紹介したさまざまな行事も、できる限り学生たちに日本の生活体験の幅を広げてほしいということから、毎年、何か新しい行事を探して紹介しています。そのような外の行事や、地域

の日本語教室や活動、寮生活、時にはアルバイトなどを通じて日本人と知り合い、日本社会を体験することによって、学生が少しでも日本や日本人に親しみを感じ、また、互いの異文化交流の輪を広げるチャンスを得ることができるように、これからも模索していきたいと思っています。

日本語学校の課題と展望

日本語学校というのは、当然ながら時代の変化や国際情勢に影響を受けるものですが、日本企業の海外進出、東アジア諸国の経済成長に伴って、日本の経済や文化に関心を持ち日本語を学ぶ人々は増加し続けてきました。また、一方で、その時々々の社会現象（災害、今年の新型インフルエンザなど）や、経済状況（最近の世界的金融危機など）によって学生数が大きく増減することもあります。

ここ10年、近隣アジア諸国の経済成長や教育制度の充実に伴って大学卒業者が増えたこと、また、日本のアニメや芸能グループなどサブカルチャーに興味を持って日本語を習い始めたという若者が圧倒的に多くなったことを感じます。このような多様化する学生たちに対して、当然、日本語学校もカリキュラムを再検討し、本国で、既に日本語を習得して来日する学生には、より高い教育プログラムの提供が必要となります。本校でも、「日本語能力試験1級合格」レベルのクラスでは、NIE（教育に新聞を）のプログラムを導入し、学生たちが自作の新聞を作るなど学生が生きた教材（新聞）で自主的に学ぶ姿勢を養い、総合的な日本語運用能力を身につけるといった大きな成果を上げています。

また、日本語教育界では、いわゆる「日本語スタンダード」の作成を数年にわたって模索しており、統一的な日本語能力の評価を学習者に示すことが急務とされていて、来年度からは、このような動きに応じて「日本語能力試験」の内容も変わります。今後、各試験の対策や個々の進学指導の情報収集やシステム化はもちろんのこと、本校では、初級の自主テキストの開発・グループティーチングなどを行い、いかに、短期間で日本社会に適応し、さらに、大学・専門学校などでの専門を学ぶに足る高い日本語運用能力を身につけさせることが出来るかを最優先に、カリキュラムの開発や教授法、教材開発などに力を入れています。

一方、現在日本語を学んでいる学生の多くは、来日して日本語を学び、日本の大学や専門学校で専門知識や技術を身に付けた後、日本企業での仕事体験を目標に据えています。ここ数年、日本企業に就職し活躍している卒業生が少しずつ増えてはいますが、特別な研修制度や就職のためのビザ取得に特別枠があるわけではなく、また、日本企業も相変わらず、高い英語能力を有する留学生を評価する傾向が強く、日本語を学んだ留学生の獲得に関心を示していないようです。現在、政府が提唱している留学生30万人計画が実現しても、それが、仕事や将来に結びつかないならば、いずれ、留学生は日本語習得に興味を失うでしょう。日本の少子化対策のための留学生増加政策という側面があるのは否めませんが、日本語を学び日本を理解し専門性を身に付けた留学生に、あらゆる分野で「東京国際大学（TIU）」の理念である「国際人」として活躍できる場を提供してこそ、日本が、留学生にとって魅力ある国になるのではないかと思います。

『国語は古文から学ぼう』

一橋学院 国語科講師 米野 正史

昔と今の受験生の言語生活

今回、受験国語で日本語をのばせるか、ということで何か書くようにというお話をいただいた。高校と予備校で合わせて三十年以上古文・漢文という古典を教えてきた者として、生徒や受験生の言語生活の変遷を目の当たりにしてきた。その大きな変化は、以前は東京周辺に住んでいる者でも結構訛りが見られたり、親や祖父母の出身地方の方言が残っていたということがあった。例えば「亀戸」をカメラと発音する子がいたり、風邪は「ヒク」か「シク」か、

布団は「ヒク」か「シク」かという、「ヒ」と「シ」の区別ができない子がいて、それなりに楽しかったものである。

一方、最近の生徒たちにはいわゆる方言や訛りの類はまったく見られない。この共通語化は、地方にも確実に浸透しているようだ。いわゆる典型的な方言はドラマの世界のものとなってしまった観がある。ところが現代の生徒たちには昔と比べてみると失われつつあるものがあるようだ。それは昔ながらの言い回しだとか、相手の立場を考えた表現のしかたなどである。



添削していると、突然「よって…」とか「ゆえに…」とくる。「数学じゃあるまいし、古文だね」と言っても理解できないのである。また「…なのだが、～」と接続助詞の「が」は順接・逆接のどちらでも使う曖昧な表現だから使わないでくれ、と言っても、「僕には分かります」とくる。説得と洗脳に時間がかかる日々が続いている。いったい国語教育とはどうなっているのだろうか。ある予備校講師の独断と偏見に満ちた独り言としてお聞きいただけたら幸いである。

英語講師から国語を習う生徒たち

この場合の国語とは教科名ではなく、「現代の言語生活を営む上での伝統的な日本語」というくらいの意味である。今の教育の場ではこれを学べるのは、特殊な教育理念の幼稚園、一般的な小学校と一部の外国人用の日本語学校、それに海外の日本人学校である。具体的にはNHK教育TV「日本語であそぼ」がその代表である。残念だが、現状では中学校から以上の学校教育では「国語」を学ぶことは難しい。現代国語の教科書には一部の配慮が見られるが、その実践はなかなか難しい。さらに高校の「現代文」の教科書は、私の言う「国語」と入試現代文との乖離が甚だしく、「現代文」はそれを実感させるための反面教師とさえ言えるものになっている。

高校生と予備校生に話題をしぼって話をすすめるが、彼らはいわゆる「国語」を英語教師の解説する言葉として学んでいるのが現状である。残念ながら「現代文」という教材はすでに日本語を学ぶ教材ではなくなっている。外国人留学生に日本の高校の「現代文」の教科書を読ませてほしい。ここから日本人の言語生活がどれだけ分かるものだろうか。難しいという程度の問題ではない。論説・評論文が中心の文章からどれだけ日本人が解るというのだろうか。たとえ文化や歴史の一端を文章から知ることができても、現代の日本人がどんな言葉を使って生活しているかは理解できない。高校の「現代文」の教科書は、実は情報の収集と分析、さらにそれに基づく自分の意見をまとめるための素材として提供されているのである。これは最近の「現代文」の入試問題の内容を見てもらえばよく分かることである。

文章の情報処理能力はたしかに必要なものである。戦略的にも現代の日本人に必要な能力かもしれない。それを手っ取り早く「現代文」として総合的にやれば、その他の教科での情報処理能力の対応にも役立つはずである。その判定のためには、判定者があらかじめ処理または判断した文（選択肢）をいくつか用意しておけば数値化できることになる。こうして選択肢中心の入試問題が生まれていくの

である。いささかラディカルであるがその一面は説明できるだろう。

受験国語と日本語能力

こうして「現代文」教師は本来の国語から遠ざかっていく。さて、当の英語教師の日本語であるが、予備校の現実を見てみると英文学・英語学・言語学を専攻した講師は少ない。それ以外の学部を卒業した講師が多数を占める。ましてや日本語教育の指導経験はきわめて少ないだろう。日本語指導は教師の経験に基づく教養と人間性に期待するしかないのである。

英語もその内容としては文学的作品は減らされ、「現代文」同様の評論・解説文が主流である。話題としても政治経済、科学哲学、芸術言語と多彩になってきている。しかし英語の場合には理解のために、日本語に直して説明するという宿命から逃れることはできない。この場合の翻訳としての日本語、説明のための日本語、これが現在における高校生の「国語」を支えているのである。さらに授業時間数と教師数の多さが加わってくる。高校一年生から始まっているといえる受験勉強の「国語」はやはり英語教師の日本語力に頼るところが大きいのである。

一方の高校生の日本語能力については、私は心配していない。彼らにはわれわれに未知の教養、常識があるのは確かであるが、知識そのものの欠如は感じられない。要するに年齢・世代的な相違があるに過ぎないのであって、大人の目から見た一方的な偏見だと考えている。ただし彼らは世間を知らないのである。これは教えるしかない。

受験国語と日本語指導

提案としては、次のことを要求したい。①英語教師の国語能力を増強させること。国語検定を設けてほしいものである。②受験生の記述能力を増強させること。レポート指導が効果を上げるはず。③受験生の発言、自己表現能力をディベートを通して強化すること。これにはクラス作りが重要になる。④古文の授業の講座数を増加させ古典常識の知識を増やすこと。恋愛、不倫、差別ありは古文だけの世界である。⑤和歌、俳句の授業を充実させること。和歌はメールであるというのが私の持論。⑥Eメール、携帯メールの書き方、表現法を日本語として確立させること。以上である。

結論としては、国語は古文の教師から習ってほしい、と言うのが最終的なお願いである。

東京国際大学の留学生支援について ～奨学金制度を考える～

東京国際大学国際交流事務部 部長 横川 知嘉

国際交流課の管轄する留学生に対する奨学金は、表1に示した大学推薦のものと、表にはしていないが受給希望者が直接応募する民間団体のものがある。いずれにしても応募規程に7番の朝鮮奨学会を除き「留学ビザ」であることが条件になっている。

表1からわかるように、1番の学習奨励費、3番の私費外国人留学生授業料3割減免が、奨学金の多くを占めることがわかる。それ以外の奨学金は、現在のような低金利時代では受給枠を増大することもできないため、なかなか給付者に選ばれていないのが実情である。

留学生に手厚い東京国際大学の奨学金

1番の文部科学省（学生支援機構=JASSO）の学習奨励費は、2009年度は学部生で162名（6ヶ月追加募集採用者39名を含む）、大学院生で24名（6ヶ月追加募集採用者3名を含む）が採択されている。推薦基準は学業評価係数が大学院2.3以上、学部生2.0以上（本学で言えば、SとA=3.0、B=2.0、C=1.0、F=0で係数を算出）となっている。08年度はこの基準が1.5以上であり成績評価の点では厳しくなったが、逆に2.0という基準を超えた学部生は申請者全員が受給することができた。例年は、学部生で60名程度、大学院で10名強の採用実績であったが、

これは福田内閣時に「留学生30万人計画」を打ち出し、補正予算も大幅に増えたことによる。まさに留学生支援に多大な支援を賜り文部科学省に感謝をする次第である。

3番の私費外国人留学生授業料3割減免は、大学として私費外国人留学生の授業料を減免すれば、そのかかった経費について「政府開発援助外国人留学生就学援助費補助金」として一定割合で文部科学省より補助をしてくれるものである。この制度の発足時の補助率はほぼ100%であったが、「留学生10万人計画」が達成に近づくにつれ、年々減少しここ数年は33～34%になっている。端的に言えば、補助率の残りの66～67%は大学からの持ち出しの奨学金ということになる。金額ベースでは、一番この額が多かったのは2005年度の98,631,000円、2008年度でも約7000万円を支出していることになる。

ここで問題となるのが次のようなことである。

1、ほとんどすべての奨学金の受給資格が「留学ビザ」の者という資格があるので、日本に住む定住者、永住者（その配偶者ビザを含む）という外国人にはその資格がないことである。

本学で言えば、表2からわかるように2009年度では学部生で95名、大学院で4名がその受給資格がないことになる。（これらのビザの人は、JASSOから奨学金を借りるこ



表1

番号	名称	奨学金月額（学部）	奨学金月額（大学院）	受給人数	備考
1	私費外国人留学生学習奨励費	48,000円	65,000円	162 24	文部科学省
2	国費外国人留学生奨学金	127,000円	156,000円（修士） 157,000円（博士）	0 修博8	文部科学省
3	私費外国人留学生授業料3割減免	年間授業料67万円の3割（201,000円）を後期授業料から減免	年間授業料58万円の3割（174,000円）を後期授業料から減免	492 57	総経費の3割強は文部科学省、残額は大学からの奨学金
4	(財)金子国際文化交流財団	50,000円	50,000円	1 2	(学)金子教育団関連財団
5	(財)インナートリップ国際交流協会	50,000円	50,000円	1 1	
6	公益信託橋本泰彦アジア・アフリカ留学生奨学金基金	50,000円	—	1 —	3年生のみ応募可
7	(財)朝鮮奨学会	25,000円	40,000円（修士） 70,000円（博士）	0 0	韓国人・朝鮮人学生のみ
8	(財)ロータリー米山記念奨学会	100,000円	140,000円	1 2	
9	(財)平和中島財団	100,000円	120,000円	1	
10	(財)共立国際交流奨学財団	100,000円	100,000円	0	
11	(株)共立メンテナンス奨学金基金	60,000円	60,000円	0	
12	(財)サトー国際奨学財団	120,000円	180,000円	0	
13	(財)佐川留学生奨学会	100,000円	100,000円	0	

※この他、本学独自の奨学金として、商学部の外国人入試成績優秀者6名へ授業料半額免除（入学時給付奨学金）や留学生も対象となる学業表彰金や学習奨励金の在学者給付奨学金制度がある。

とはできる)

2、表1、1番の学習奨励費を受給できる人は、学部生で年間576,000円、大学院生で780,000円を受給できる。しかも3番の3割減免も適用を受けられるので、学部生で年間777,000円、大学院生で957,000円を受給できる。これに対して日本人学生ではほとんどの人が奨学金を得られず、学費全額を負担しなければならない。あまりにもこの差は大きいと思われる。

日本国民の税金で、外国人留学生には補助金を出す、困窮している日本人学生にはほとんど学費の支援がないということである。

3、文部科学省の奨学金は、2009年度は「留学生30万人計画」と「景気刺激対策としての補正予算」のお陰で奨学金の一人当たりの受給額としては減額されたが、経費全体では大幅に増額された。しかし民主党政権に変わりこの政策が維持されるかは不明であるし、日本経済の停滞から財源不足のため削減という可能性も高く、文部科学省の奨学金に頼りきってはいは危険である。

問い直される留学生支援のあり方

4、表1、3番の3割減免では、私費外国人留学生数の1番多かった2005年度には、この制度の補填のため大学からの持ち出しが1億円近くにも上った。この制度の規程には「学業が優秀で、経済的に困窮している外国人留学生に奨学金を与

える」となっている。2008年度に学業成績でGPAが1.0未満の人には適用されなくなった。はたしてこのGPA1.0が学業が優秀と言えるであろうか。今後この基準は上げざるを得ないと思われる。また、経済的困窮度は残念ながら調査できずに減免を実施しているのが現状である。本学とほぼ同じ学生数、留学生数でやはりこの3割減免で1億円ほど持ち出しのあった桜美林大学では、5年ほど前にこの3割減免制度を廃止し、成績優秀、修学状況の優秀な留学生に授業料免除制度に切り替えたそうである。この廃止により一時は留学生志願者が半減したそうであるが、その分奨学金が大きいため優秀な留学生が来るようになったそうである。学部定員の確保に躍起になっている現況ではこの点は相当精査し、国際交流のありかたまで方針を決めて実行に移すことが肝要である。

以上、簡単であるが現在直面している東京国際大学（広い意味では日本すべての大学）の留学生に関する奨学金についての課題を挙げてみた。日本での生活費（衣食住、交通費）は諸外国から比べれば遥かに高額である。入管に出す書類には、経費支弁は万全なものになっているはずであるが、実際には母国からの仕送りのほとんどない留学生にとって、これらの奨学金は日本での生活を支える重要な資金である。奨学金の恩恵を受けている留学生には、その原資は日本人の税金であることを肝に銘じ、勉学に励み、日本を活性化する礎になっていただきたい。

表2 東京国際大学の留学生数

年度	学部			大学院			合計
	留学ビザ	それ以外	小計	留学ビザ	それ以外	小計	
2005	728	54	782	123	5	128	910
2006	640	56	696	124	4	128	824
2007	570	66	636	113	6	119	755
2008	548	82	630	98	2	100	730
2009	568	95	663	93	4	97	760

学生支援室による留学生サポート ―現場からの報告

東京国際大学学生課・学生支援室 瀬戸口 勲

学生支援室は、全学生を対象に授業の出欠管理を実施し、進級・卒業を支援するという目的で2008年4月に開設された。現在は既存の業務に加え、留学生のための履修相談ないしは生活相談の場としての役割も担うようになっている。それゆえに学生支援室は留学生の不安や不満の声がダイレクトに入りやすい場所でもある。「アルバイト先が見つからない」「アパートの保証人が見つからない」「学費が捻出できない」「日本人の友達ができない」「授業が難しくついていけない」等、留学生の悩みは尽きない。上記のうち、学生支援室が積極的にフォローし得るのは、後2者である。

日本人学生と気軽な交流を促すよう配慮

「留学生支援」というテーマについて、学生支援室での業務を通して私が特に感じることは、留学生と日本人学生の交流が希薄であるという点である。なぜ交流が限定的であるのかを考えてみると、留学生個人の問題もあるが、彼らを受け入れる側である私たちの準備不足にも原因があるのではないだろうか。それは日本が島国であることに起因する面があるのかもしれない。しかし、本学では創学以来一貫して「真の



国際人の養成」という理念を掲げており、国際的な広い見識を持ち、尚且つ様々な国の人々と積極的に関わっていける人材を多数輩出することに取り組んできた。以上のことを鑑みれば、本学に在籍する日本人学生が留学せずとも一定の国際感覚を身に付けられるような方策を立てることが重要である。そのためにも留学生と日本人学生との交流をこれまで以上に活性化させなければならない。

学生支援室では、学生達が懇談するスペースを設けているが、留学生が入室している際には、無理強いをしない範囲でその場にいる日本人学生と会話をさせるようにしている。最初は互いに人見知りをしているが、慣れてくると次第に会話も弾むようになってくる。この時、私たち学生支援室スタッフは司会の役を務め、できるだけ留学生の話題を中心に据えることで留学生からたくさん話を引き出すようにしている。なぜなら、留学生の多くは、母国の文化や風習について、日本人の友人に教えたいという思いを少なからず持っているからである。このように、学生支援室では留学生と日本人学生が自由且つ気軽に話ができる環境作りに努めている。

留学生が抱える諸問題の中には深刻なものもあり、私たちスタッフがいくら奮闘しても解決できないようなケースもあるが、とにかく私たちはどんな話でも真摯に耳を傾け、彼らの悩みを真正面から受け止めるよう心がけている。また、授業内容が理解できずに困っている留学生がいれば、日本人学生と交換教授をさせたり、議論をさせたりしてお互いの交流を深めるように導いていく。そうした対応の甲斐あって、一度学生支援室へ来室した留学生のリポート率は非常に高い。その意味では、学生支援室は、留学生と大学を結びつける場、更には、留学生と日本人学生との相互理解を増進させる場として機能していると言える。

周知の通り、現在、本学における留学生の割合は、アジア諸国からの留学生が大半を占めている。先進国であり尚且つ地理的にも近い日本を目指して、アジア諸国から多くの留学生がやって来ることは自然の流れとも言える。それは国際的に見ても日本の大学の評価が依然として高く推移しているこ

とを裏付けるものであり、今後もこうした傾向は大きく変わらないことを期待する次第である。変わらないとするならば、本学としては、今まで以上に諸外国、特にアジアに目を向けた取り組みが必要になってくるのではないだろうか。

日本人学生との相互理解を増進する全学的な取り組みを

留学生と日本人学生とが相互理解を増進させるための環境作りを、今後は学生支援室や国際交流課だけではなく、全学的に拡大していく必要があると考える。例えば、すぐに実施可能なものとしては、中国語や韓国語を履修している日本人学生と留学生とが交流する場を随時設けるのが良いと思う。これについては、日本人学生が留学生との交流を通して語学学習への意欲が高まることが期待できそうである。

更には、留学生の母国の料理を学食で提供することも一案である。そうすれば、中国には多民族に応じた多種多様な料理があることや、イスラム圏のように豚肉が食べられない国があるという事実についても学食に行けば知ることができる。また、学食での交流がきっかけとなり、留学生と日本人学生とが相互理解を深める可能性も出てくるはずである。すなわち、TIUのキャンパスにいれば、日本人学生にとっては留学生との交流や異文化体験等によって、無意識のうちに国際感覚が身に付くような環境を整えることが肝要である。

このような取り組みの積み重ねにより、多くの日本人学生が留学生を暖かく迎えようとする意識が芽生えていくことを期待したい。

本学における留学生支援はこれから良い方向へと展開し、TIUが留学生にとって満足度が高く、より国際色豊かな大学へと発展し得ると信じている。

一人でも多くの留学生が、日本に来たことを良かったと思い、TIUに愛情を持って卒業してもらおうよう教職員一丸となった留学生支援体制の強化が望まれる。

私たち学生支援室スタッフも微力ながら努力を重ねて本学の更なる発展のために邁進していきたい。

留学生の就職を支援する東京国際大学の体制

東京国際大学学生支援部就職課 部長 原田 英一

昨今の厳しい経営環境のもと、民間企業の求人状況には明るい兆しは見えてきておりません。日本人の新卒者でさえも大変厳しい就職活動を強いられる中で、外国人留学生（以下留学生という）の日本での就職状況は更に芳しくありません。

留学生 30 万人計画への対応

2008年に政府より発表された「経済財政政策の基本方針

2008」では、国際的な人材強化を国の一つの柱とすることで、2020年を目処に留学生数を30万人にする計画を打ち出しました。これに基づき、留学生は年々増加する傾向にあります。

独立行政法人日本学生支援機構の調査によると2008年の留学生の総数は、12万人を超え、国別では、中国（58.8%）、韓国（15.2%）、台湾（4.1%）の上位3カ国で



していただいている。そして留学事前講習期間を通して、リスト上の学生を含めて参加学生全員の講習会参加への姿勢や学習態度に注意を払って観察し、事前講習終了日までに、素行・学習態度要注意の学生や健康面で長期の海外留学が危ぶまれると思われる留学ハイリスクの参加希望者の情報をまとめてそれぞれの対応策を検討。その結果を国際交流課に報告して状況に応じた具体的アドバイス、継続指導などをお願いするなど、出発前に送り出す側のTIUにおいても最善の事前処置・指導を強化していただいている。

保健室や学生相談室を通してご両親との情報交換を図り、健康面で不安がある学生や既往症のある学生へのアドバイスや個人面談の機会もこの期間にTIU学生相談室や保健室の全面的な協力を得て提供し、精神的サポートや必要に応じて専門医からの正式な診断をお願いするなど、出発までの2ヶ月間でできる具体的な参加希望学生へのサポートを行っている。

留学体験を深めるウ大生との寮生活

異国の地での大学キャンパス内での長期寄宿生活。違った言語や文化だけでなく、異なった個性・知識・考え方を持ったウ大生とTIUA生達が、カネココモンズ寮群を含んだ12のウ大学生寮に散らばって共同生活を通じて絡み合う。

受け入れ側のウィラメット大学も「グローバル教育」をリベラルアーツ教育理念の一つに掲げ、学生達が外の風に吹かれ、異質な背景を持った人たちとわたりあえることを積極的に推奨し、卒業生の半数以上が海外留学経験を持つという実績を誇っている。そして毎年やってくるTIUA生を含む世界各地からの留学生達を可能な限り受け入れることにより、オレゴン州セーラム文化圏にしながら異文化に直接触れられる機会をできるだけ多くの学生に提供している。

TIUAとウ大の学生にとって、学生寮における共同生活は未知なる経験であり、お互いに異なった背景を持ったもの同士の共同生活は留学においての大きな挑戦である。この第一の難関を双方にとってスムーズにかつ有意義なものにするために、ウ大キャンパスライフ関連部署はTIUA生の到着2ヶ月以上前から受け入れの準備にかかっている。12月のTIUでの留学事前講習会時に、ウ大作成の入寮希望用紙にTIUA生の自己の情報・希望などを英語で記入させ、その基礎資料を基にウ大寮生活支援部の担当者が性格や生活特性、趣味などが似通ったルームメイトの募集・選定を行っている。

異質な背景を持った両大学の学生達のなかから僅かな共通項を見つけ出すことは細かく時間の掛かる仕事となるが、語学のハンディーがあっても共有するものや相通ずるものをできるだけ事前に見つけ出すことにより、比較的スムーズな共同寮生活への導入と友達づくりを可能にしている。

姉妹校であるウ大との45年の信頼関係を礎に、ウ大キャンパスライフ部門と協議を重ね、TIUA生の留學生活の質の維持と双方の学生がより満足できる学内共同生活を提供できるよ

うに、「Optimizing TIUA Experience」(留學経験を最大限活用するための)特別委員会が2年前に発足した。ウ大とTIUA責任者、そして両大学の学生代表をメンバーに加えてアイデアを出し合い、2月初旬の到着をキャンパスのあちらこちらで歓迎する企画を具体化し、新しい生活環境に馴染んでもらうための各種サポートをウ大と共に準備している。

到着直前には各寮内で独自の名札や歓迎のサイン、新入寮者の紹介ボードなどを作成してTIUA生到着の期待度と歓迎の雰囲気高め、そして到着日にはウ大キャンパスライフ部門のスタッフも到着時の事務手続きや入寮手続き、各寮への移動や入室時の荷物運びなどを手助けし、キャンパスが一体となって歓迎している姿勢はTIUA生の存在感を高め心を和ませてくれているだろう。

TIUA生にもウ大生並みの支援

到着後の最初の週は「TIUA Opening Days」と呼ばれる5日間のオリエンテーション・ウィークとなる。TIUAとウ大関連部門の専門スタッフが事前講習で説明した学業内容、寮生活の仕組み、学生活動などに関してさらに詳しい説明や細かい指導を行っている。その他、ウ大学長出席での歓迎式典やキャンパスツアー、英語科目のクラス分けやパソコン環境整備ガイダンス、そしてセーラム市内にて日常必需品の買い物など、学生達は日中大変忙しいスケジュールをこなすことになる。夕食後は各寮の“寮風”に合わせたウエルカムパーティーや友達づくりのゲームなど歓迎行事が学生主体で行われ、ウ大生同室者がいない学生には各寮棟や階のリーダー達が周りの部屋に住むウ大生を紹介したり、部屋を訪れて交流や会食を試みるなどして、TIUA生が到着した時点での緊張や不安をできるだけ軽くして寂しさや疎外感を取り除くことに努力し、早く寮生活コミュニティの一員として溶け込めるように十分な配慮がされている。

ウ大キャンパスにおいてウ大生が通常受けることのできる学業面や寄宿舎共同生活面でのサポートは、現在ではTIUA生も同等に受けることができるようになっている。これはTIUA生がたとえ11ヶ月の留學という一時在学であっても、ウ大が提供している学生支援を十分活用することができるということであり、彼らがウ大キャンパス・コミュニティを形成する一員であることを意味している。

II.カルチャーショックやアカデミックショックなど留學生活・精神面でのサポート

大きな期待と不安を背負って日本からやって来る留學生だが、留學事前講習会で説明されたことやプログラムを修了した先輩達から聞いた話だけでは、実際の留學において直面するカルチャーやアカデミックショックなどの壁を越えることはそう容易なものではない。

これら留學に特有な壁の克服を効果的にサポートするため、

TIUAの英語教員やウ大とTIUAのキャンパスライフ専門職員、Bilingual Advisors (バイリンガル・アドバイザー*)、ウ大生寮管理部スタッフからの協力により、学生がこれらキャンパス内の学生サポート資源とシステムを利用して早期にウ大キャンパス・コミュニティの一員としてうまく機能しつつ、留学生生活を充実させるように援助している。

* Bilingual Campus Life Advisors (BiCLA) :

年間を通して必要に応じて稼働するTIUAキャンパスライフ部の専門職スタッフ。英語・日本語での留学生活一般やアメリカ事情の情報提供、教務関連の難解事項の説明や各種アドバイスを提供。ウ大キャンパスライフ関連部署との密接な協力関係のもとで品行、安全対策、健康面などの言語サポートもおこなうセーフティネットの役割も果たす。

しかし生活面や精神面でのサポートには、ウ大のような居住型の寮共同生活コミュニティでは、通常の授業・就業時間以外の放課後やキャンパス・寮生活に戻る夜の時間帯、週末のサポートも非常に重要・不可欠である。学生達に24時間対応できるウ大寮学生スタッフに加えて、留学又それに類似した経験やトレーニングを持つウ大生をTIUAで独自に雇い、多角方面から学生をサポートすることが効果を上げている。春学期のInternational Peer Coach (IPC)*プログラムや夏学期に配置するSummer Community Associate (SCA)*と呼んでいる寮住み込みのリーダー達などがその例である。

* IPC (International Peer Coach) Program:

到着時から約1ヶ月半の間、アメリカの大学での新しい生活環境に順応するための支援とキャンパス・コミュニティへのスムーズな導入を主目的に「コーチング」するウ大生リーダー達。学生10名から12名に一人の割合で配置し、学生の立場からの日常生活に必要な情報の提供や他のウ大生への橋渡し、キャンパス行事へのエスコートなどを行う。

* Summer Community Associate (SCA) :

ウ大が学期を終了した後のTIUA夏学期と夏休みの3ヶ月半の間、Kaneko Commons寮群に住む夏期寮共同生活コミュニティのリーダーとなるウ大生達。6週間の夏期集中学習学期を和やかに建設的に過ごせるように支援。夏休み期間中もTIUA生の第二の家であるKaneko Commons寮群の管理、各種アクティビティやボランティア活動などを手伝う学生メンター(助言者)として機能する。

教職員と学生スタッフが一体となって学生達を見守っていくサポートシステムにより、学生の成長過程に起こる諸問題や異文化環境での留学生活からくる問題などを、ウ大とTIUAにある何層もの問題察知メカニズム(セーフティネット)の中で早期発見し、関係各部署間において定期的な情報交換を常にしながら対応している。また必要に応じて不慣れな概念やニュアンスそして言語などの面でTIUAスタッフがサポートするという形で介入し問題解決を支援している。このことは状況の悪化を未然に防ぐと共に、状況に応じた適切なアドバイスや処置をタイムリーにすることに繋がっており、行き届いたケアを提供することに役立っている。

基本的にはアメリカの大学での留学経験であることを重視して、できる限りウ大の学生支援システムの中で協力しながら留学の生活面や精神面でのサポートに対応していくことが、両大学の協調関係とこのプログラムの質を長期に渡って維持していく上で重要な鍵となっている。

また、到着後の春学期と秋学期を通して、25人程度のグルー

プで行うCollege Learning Sessionsを行っている。異文化での留学生生活を有意義なものに導くための基礎知識やスキルを教え、セーラム市コミュニティの協力により日米間の文化的、社会的、教育的な違いや問題点を、自己の経験として学んでいく機会を提供している。TIUAカリキュラム上、TIUでの演習としての役割を果たしている。

III. 学業についていけない学生への対応や語学力の補強策など



TIUA留学プログラムの特徴の一つとして、できるだけ多くの学生にこの素晴らしい留学経験をしてもらおうという姿勢からいろいろな学業背景をもった学生達が集まって来ている。TIUAプログラムでは英語力が低い学生でも、学習意欲、目的意識がはっきりしていれば、アメリカの大学での学習スタイルやオール・イングリッシュの授業でもついて行けるような仕組みと実績も持っている。

プログラムには3つの学期があり、春学期のアカデミック英語基礎力養成期、夏学期の選択科目などを通しての英語力充実期、そして秋学期で総合英語力実践期として本格的な学びを実践できるように段階的に英語力を伸ばしていくカリキュラムが組まれている。

英語科目は英語習熟度レベル別の参加型集中授業でアメリカの大学での授業をこなすために必要な能力を養成、夏学期からのTIUA選択科目ではウ大教員の科目など本格的な学科目の勉強となるので、選択科目と併用してApplied English(応用英語)を履修することにより、学科目攻略のための英語面でのサポートをしている。秋学期はいよいよウ大生が履修している正規科目の履修も可能となり、英語力補強科目やTIUA選択科目+応用英語と合わせて、ウ大生に限りなく近い留学経験ができるのである。

各英語科目教員がプログラムを通してAcademic Advisors*として学生の学業面を細かく指導し、学業不振や軌道修正が必要な学生には適宜指導やアドバイスを行っている。更に、成績のよいウ大生をTIUAで採用してAcademic Peer Tutor(学生チューター)制度*を充実させ、慣れないアメリカの学習スタイルや課題のこなし方など、きめの細かい学業面でのサポートを行っている。

* Academic Advisors:

TIUA英語科目教員による学業面に関する助言やサポート。到着後のクラス分けの後に学生10名から12名に一人の割合で配置。プログラムでの3学期間を通して学業の進捗状況を確認、選択科目やウ大正規科目の履修などの指導、TIUAとウ大での学習経験をいかに最大限利用するか、などについて話し合っていく。

* Academic Peer Tutor Program:

TIUA教員の指導による全米チュータリング協会公認のプログラム。各学期の開講科目に応じてウ大成績優秀者から選ばれた同年代の学生が、正規のトレーニングを受けて英語科目や選択専門科目、またウ大正規科目の習得をサポート。TIUA生と共に授業に参加した後、授業時間外や週末に教員からの指導による補修や課題のこなし方の学業アドバイス、課題論文の見直しなどを学生の立場からマンツーマンでやってくれるため、英語での科目履修上の強力な支援力となっている。

しかしながら、時折これらの仕組みや人的資源の配置があっても、学業面において遅れをとってしまう学生も少数であるが出てきている。諸種の支援システムにもかかわらず、学業不振が継続した場合には、TIUAプログラムでの学業継続が不可能と判断され、留学を中止しなければならない場合も発生している。このようなケースはプログラム運営側としては大変残念なことであり、このようなケースを防ぐため、所々にチェックポイントを設けてタイムリーに指導・アドバイスをを行いながら、それぞれが掲げた留学の目的に到達できることを願いながら細かな軌道修正業務を行っている。

授業開始後3週間時点で、全てのTIUA生対象に、英語科目担当教員（兼 Academic Advisors）に学業進捗状況の四半期チェックを依頼して、学習態度に問題があったり立ち遅れたりしている学生に必要な指導とアドバイスを行っている。次に春学期中間点6週目の3月中旬においてもチェックポイントを置いて、各教員から英語での学業達成を目的とする必修英語5科目（Speaking, Listening, Reading, Writing, Grammar）の中間評価と所見が提出される。

学生が授業に合格する基準を満たしていない場合は、その

状況の深刻さに応じて Academic Warning（学業警告）として担当教員と細かく改善策を話し合うか、または Academic Probation（学習状況審査期間）として TIUA Academic Program Director（学務部長）と Campus Life & Academic Services Director（キャンパス生活部・教務部長）と面談し、学期末までの学業の改善が見られない場合は留学における学業継続不可能とみなされ TIUA 留学プログラムを中止しなければならない可能性があることを説明。学期終了時までの隔週学業チェックなども取り入れて、何とか学期末の最終成績が TIUA 在学条件を満たすように、そして帰国勧告がでないように、真剣に取り組むよう指導している。

以上、留学生を受け入れる現地側の配慮、異文化経験からくる数々の障害や壁を乗り越えるための学内サポート、学業についていけない学生への語学力の補強策や対応について掻い摘んで説明した。11カ月の「TIUA 留学プログラム」に参加する学生達ひとりひとりが、プログラムを滞りなく終了してそれぞれの留学を成功させ、充実感と自信を持って全員無事に帰国できるように願ってやまない。

入学前相談から学習・生活、進路指導まで—付属日本語学校からの報告

東京国際大学付属日本語学校

「講師室のケア」

教務副主任 山川 正子



講師室では講師が個々の学生の事情とニーズをより早く知り、常に講師間の情報共有、講師室側と事務局及び進路相談室との連携による迅速な対応はケアにつながるものと考えています。

1. 学習面

学習方法・学習習慣の指導

キャッチアップのための補習授業・取り出し授業

再クラス発表直後、ショックを受けた学生などのフォロー

2. 生活面（事務局と連携）

アルバイト・生活環境・交友関係を把握する。

出席状況・修学態度・心身の健康面に注意を払う。

何か学生に問題があった場合、まず担任が面談し、迅速に事務局担当者に連絡、対処しています。その際、通訳を必要とすることもあり、初級の学生の場合、事務局と連携し、通訳を介して問題解決に努めています。

初級にかかわらず、精神不安定に陥った学生などには母語でゆっくり話を聞くことによるメリットもあります。

3. 進学サポート（進路相談室と連携）

進学・進路指導

志望理由書、研究計画書等の作成の手助け

志望校の面接試験指導及び面接練習

4. 卒業後のアフターケア（事務局及び進路相談室と連携）

卒業後の進学先でのトラブルや悩み相談

再進学に伴う成績証明書関連の所見記入等

これらのケアは、在籍期間（1～3）にとどまらず、卒業後のアフターケア（4）も必要とされています。

またクラス担任は以上の点を中心に個人面談を行い、問題があれば、随時学生の相談に乗り、学生に変わった様子が見られた時には迅速に対応することを心がけています。その際、事務局及び進学相談室との連携は欠かせません。

「進路相談室のケア」

教務主任 宮田 百合子



本校は、専門学校・大学・大学院へ進学を希望する就学生のための「進学予備教育課程」が主体の日本語学校ですから、「進学・進路指導」は常に「学生ケア」としての重要課題でした。

学生数が少ないときは、クラス担任や事務局のスタッフが通訳も兼ねて進学相談をしていましたが、学生数が増えてきた頃から、進学資料室という形で独立した部屋を持つように

なり、数年前からは、専属のスタッフや進学担当教師も加わり、充実した《進路相談室》としての機能を持つようになりました。

業務内容としては、入学時から数回に渡る「進学・進路調査」、「最新進学情報の提供・閲覧—卒業生の体験記録の開示」、「進学相談会の企画・開催」や「個々の進学相談」、「研究計画・志望理由などの指導—クラス担任との連携」、「進学のための面接練習」などが主なものです。また、進学実績を上げるためには、母体の東京国際大学を始め、指定校推薦のある大学・専門学校等との関係作りや情報収集は大切な業務です。

また、事務局担当者との連携で個々の学生の履歴、成績などの情報のまとめや「進学戦略企画室」としての機能を果たす場所として、就学生の進学に向けたきめ細かいケアを目指しています。また、学生たちが気軽に出入りし、ちょっとした悩みやおしゃべりが出来る「保健室」のような役割を果たすこともあります。

ここ数年は大学卒、大学院卒の学生の比率も高くなってきており、進学を希望しない学生が増えてきているので、それらの学生向けに帰国後の就職情報の提供や、本校OB、OGによる就職体験座談会の企画等、《進路相談室》はそれぞれが希望の進路につけるよう重要な役割を担っています。

「事務局・海外分室のケア」

事務局次長 金子 泰敏



本校の学生へのケアは、実際には入学前から始まっています。入学希望者は日本で1年ないし1年半、日本語学校の卒業後、進学するのであればさらに数年間、母国の親元を離れ異国の地、日本で生活することになります。もちろんすぐに仲間は出来、学園生活を謳歌しはじめますが、それでも実際に入学が近づいてくると、緊張状態が高まってくる入学者やご家族もままあります。

他の多くの日本語学校と違い、海外分室体制を敷いている本校は、海外分室、日本事務局、募集担当者、教員と連携し、そのようなケースにも迅速に対応出来、個別に相談に乗り、一つ一つの不安を取り除くことが出来ます。

無事に入学を済ませ、日本での生活が始まると、学生の多くは母国との習慣の違いにとまどいます。昨今の情報化社会はあらゆる情報を瞬時に、留学の事前に入手できます。しかし実際にその場に身を置いてみるとやはりショックは大きく、なかなか日本の習慣になれない学生も出てきます。それらの学生へのケアも十分に行う必要があります。一例を挙げると、遅刻や欠席が多い学生への事務局での面接や、住まいの訪問、急に体調が悪くなった学生には、土日であっても病院まで付き添うこともあります。また、避けられない事情があり、急遽帰国しなければならない学生を教職員が空港まで送り届ける事もあります。(これらのケースは頻繁にあるわけではありませんが…)

その他、日本の文化や風習を知ってもらうために様々なイ

ベントの企画を行います。

クラブ活動としての華道、茶道、書道、囲碁・将棋、近隣大学、小中学校との交流、盆踊りや花火大会への参加、歌舞伎鑑賞や相撲の見学、その他にも毎月1回は何らかのイベントを催せるように企画し、学生に参加の機会を持ってもらえるよう努力しています。

これらのように、日本語学校は教職員一丸となって、学生が有意義な留学生活を送り、(過保護にならないように)常に見守り、無事に本校を卒業し、希望の進路に進ませることが教職員のケアであると考えています。